特集　ひとり ひとりの「あたりまえ…」

共に生きよう

ひとり ひとりの「あたりまえ…」は、人の価値基準や判断基準など言ってみれば「その人そのもの―」。傷つけて良いはずはないのに、現実は自分の「あたりまえ」でつい他人の「あたりまえ」を傷つけてしまいがちです。障がいのある子ども達の居場所づくりや、集団生活を学べる場所として、スタートした「放課後等デイサービス事業」。この事業が行われている現場の息遣いに耳を澄ませて互いの「あたりまえ」を大切にし互いが「あたりまえ」に暮らすための　共生のヒントを探ります―

（写真上）「からふる吉田」の施設内では、写真のとおりカラフルな下ばきを使っています。均一ではない下ばきが並べられているその光景は、ひとりひとりの個性を尊重していることを象徴しているようにも見えます。また写真の下ばきをよく見ると、同じ色でも使い込まれ方や、履き込まれ方によって微妙に色が違って見えます。人は誰しも自分なりの「色」を持っていて、経験や学びを重ねて自らの色を少しずつ変えたり、色を足して多彩になっていくのかもしれません。そしてそれを「成長」と呼ぶのかも…。
　さて、私の中の「私の色」は今どんな色になっているのか？つい考えてしまいました。

8月3日の蒸し暑い日、合同会社グラース（代表 橋本真理子さん）が運営している児童デイサービス「からふる吉田」を訪れました。夏休みなどの長期の休みになると、小中学生を中心に子ども達が増え、常時10人程の子ども達が利用しています。

1年前、管理責任者の渡邊奈津子さんが「からふる吉田」に関わり始めた頃は、子ども達の衝突でハラハラする場面も多かったとのことです。

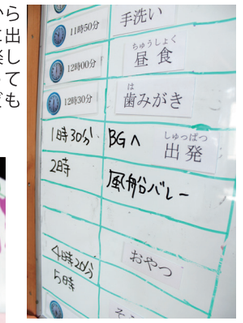
「変化を受け止められない子、言葉で自分の思いをうまく伝えられない子、相手の思いを感じ取ることが苦手な子にとって、集団の中で人と関ることは、私たちが思っている以上に難しいことです」と渡邊さんは話してくれました。「また逆に、感性が繊細で相手を思いやる優しい子、勉強面で特定の科目に得意な子、絵画など芸術面で感性を発揮する子など、個性溢れる子どもも多くいます」と話してくれました。

こうして子ども達の個性を、スタッフが受け止めながら、場面を変えたり、時にはスタッフが思いを代弁したりと試行錯誤の1年を過ごして、現在にいたります。

そして渡邊さんは「衝突も含めて、人と関り合うことが成長のきっかけになる」と言います。さらに渡邊さんは、「スタッフが細心の注意を払い、その子の持つ得意な面を伸ばし、子ども達にとって『ほっ』とできる場所づくりのお手伝いができたらいいな」と話してくれました。

今現在のお気持ちを伺ってみると、開口一番「楽しいですよ、子ども達は毎日色々な顔を見せてくれます。その成長し変化していく姿を間近で感じられることに感謝の一言ですね」と渡邊さん。

寄り添え合える場所で、関わり合い、共に成長する、「共成」。
「共成」し「共生」する―



（写真右）とある日の「からふる吉田」ではB＆Gに出かけて、風船バレーで楽しく遊びました。こうやって予定が書いてあると子ども達は安心します。

（写真左）「からふる吉田」の子どもたちはお絵かきが好き。壁には子どもたちが書いた絵がたくさん飾られています。

～自分の思いで自分の人生を選択して欲しい～

「私が話すことは、私の経験を通した個人的な話です。障がいのある子どもの保護者の気持ちを代表して話す訳ではないので、それを前提にインタビューをお受けします」と久美子さんは、不慣れなインタビューに戸惑いながらも、凛とした表情を私に向けてくれました。

ふゆちゃんが3歳の時、久美子さんは、気持ちが張り裂けそうなくらいピークを迎えていました。当時を振り返って久美子さんは、「彼女のことが見えていなかった」と語ります。

「彼女は知的障がいに加え、少し難聴もあるので、しゃべるのが遅くて、彼女が私に伝える言葉の意味がよく分からなかった。いや、向き合う方法が分からなかったから、分からなかったのかもしれません。毎日、言葉をぶつけられているみたいでした」。

「頑張って外出しても、他の子と違ったことをする、人目が気になり、家に帰ると『連れて行かなければよかった…』と、いつも後悔していました」。

3歳になって療育センターにも通うようになったふゆちゃんは、関わる人が増えて、どんどん心が育っていきます。でも、それを久美子さんに伝える方法を持っていませんでした。

周囲のアドバイスも心に響かないくらい疲れ果てた久美子さんに転機が訪れたのは、ふゆちゃんが自分の気持ちを伝えるために、独自の「手話」を開発した時からだと言います。

「彼女の気持ちが少しずつ理解できて、他人に彼女の気持ちを伝えることができた時、初めて本当に彼女を認められた気がします。そして、嬉しかったです」と話してくれました。

「彼女との関わり方が見えてきて、心が落ち着いてきました。まあ、今でも悩みや不安はあります。でも何かあったら、黙って話を聞いてくれる家族がいて、気持ちを共有できる仲間がいて、お世話になっている『くらむぼん』のスタッフの皆さんや地域の仲間がいて、何よりも成長を感じさせてくれる彼女が頑張っているから…」と周囲の支えがあるから、今があると語ります。

そして、こうも話してくれました。

「一人じゃないから、何があっても大丈夫、これだけは言えます。だって落ちっぱなしの人生なんてないし。

彼女には沢山の経験をしてもらって、心を『太く』育てて欲しい。そして、自分の思いで、自分の人生の選択をして欲しいと思っています」。

「共に歩む人」がいるから
「共に生きて」いける―
あなたの周りにもきっといます。

「よく友だちが『大変な仕事をしてるな』って言います。そんな時ボクは―みんなも、厳しいノルマがある大変な仕事をしているだろ？だから、障がいのある人と関わる仕事が特別に大変だと思うのは違うんじゃないか？って返すようにしています（笑）」

ここ「くらむぼん」は社会福祉法人ひとは福祉会（理事長 寺尾文尚さん）が運営する事業所です。同福祉会は、4年前に制度が成立する10年以上も前から、この事業に取り組んできました。施設長の佐竹正充さんに事業の目的や子ども達との関わりについてお聞きしました。

「ここは障がいのある子ども達にとって、『～しなければならない』という場所ではありません。学校が、がんばる所、家庭が、くつろげる所なら、ここは、仲間と学べる所です。

例えば月曜日におやつのメニューを決める『話し合い』という活動があります。火曜日に材料の買い物に行き、水曜日におやつを作る。子ども達は、集団生活の難しさや楽しさ、地域の方々との関係、生活力、公共マナーを経験から学びます」と佐竹さんは施設の意義を語ります。

有名政治家の障がい者に対する認識不足の発言を例にとりながら、「未だに多くの人は、障がいのある人に対して、何もできないと思いがちです。ですが、彼らに支援は必要であっても、何もできない人たちではありません」と話され、こう続けます。

「そして私は、彼らを一方的に支援する人ではありません。私が彼らから、学び・気づかされることだって多くあります。彼らは自分らしく逞しく生きていて、私たちと同じように、人としての尊厳も、周囲に認められたい気持ちもあります。

だからこそ、地域・人と繋がった環境が、学び・育つ場として必要なのです」と話してくれました。

繋がりを持ち共に育つ「共育」。理解し合い共に生きる「共生」。「共育」と「共生」は繋がっている―

（写真上）利用者一人ひとりに策定される「支援計画書」を見る佐竹施設長。施設の担当者、保護者を交えて丁寧に記載されている支援計画書は、すべて「ふりがな」が振られています。「なぜそこまで？」との問いには、「以前、成人の利用者に自分に読めない書類はただの紙くずと言われまして…。もっともだなと思ってふりがなを振っています」と笑顔で答えてくれました。
　そんな佐竹さんは障がいのある人と関わることを「大変なこと」と捉える周囲の意識に問題があると感じています。障がいのある人と関わることは「ひとりの人間がひとりの人間と関わる、それ以上でもそれ以下でもない」。
　インタビューを通してそう言われている気がしてなりませんでした。

（写真左）この日の「くらむぼん」では子どもたちによるクッキングが行われていました。指導員の方に優しく手を添えられ「できるだけ、できることを増やす」ことも大切です。ちなみにメニューは定番のカレーライス！

（写真左）この日、近くの小学校が登校日でした。真剣な表情でにんじんの皮を剥いている彼は、学校に行っている友だちのために、一生懸命カレーライスを作っていました。このカレーライスが出来上がる頃にはたくさんの仲間が「くらむぼん」にやってきます。